



桐箱作りひと筋65年。手にした瞬間に温もりを感じることができる箱を作りたい」と語り、本年度の山形市伝統的工芸産業技術功労者褒賞を受けた吉田長四郎さん

（53）は高校卒業後、京都の櫛木下商店で5年間修業し平成3年に帰郷した。「どこでも買える桐箱ではなく、職人が技術を惜しみなく注ぎ込んだ、ここでしか買えないオーダーメイドの桐箱を提供したい」と、サクランボをはじめ、ラ・フランス、板そば、地酒といった贈答品用や、スマホスピーカー、御朱印帳を入れる箱などデザイナーと組んで、現代人

の生活に馴染むアイテムを数多く考案している。平成27年に「美味しい田んぼ」と名付けて製作を担当した「桐米びつ」がグッドデザイン賞、令和元年には桐製ブックケース「本の正倉院」が「につぼんの宝物JAPANグランプリ」の工芸・雑貨部門でグランプリに輝いた。桐の調湿性・防虫効果を生かし、湿気や紫外線、虫に弱い

希少本・豪華本の所有者向けに考案した、手触りの良さや木目の美しさ、木の質感、柔らかな曲線等々山形桐箱にかける思いをプレゼンテーション。審査員に感動を与えた。桐箱作りの工程は、原木をあく抜きして作成に必要なサイズを整えるカット。枠となる外側を接着材で固定後、木釘でつなぐ組み立て、ふた底付け、割り、箱の本体とフタとが

「守っていくには常に新しい商品づくりがチャレンジしていかねばならない。作業場はそんな空気に包まれていた。

最近はず味気のない大量生産のものがある。木製しかも桐材の手作りの品々を見るとホッと致します。なぜか作った方の想いと温もりが、それぞれに込められているようで、自然に大切に使用していただきたいという気持ちになります。これから時代のニーズに合った様々なものを作っていたら、山形桐箱組合を名実共に山形の伝統的工芸品として広く認知し普及に努めていただきますよう期待します。

手くはまり込むよう本体に段を設けるインロー付け。そして表面を削り木目を際立たせる仕上げ。その仕上げを担当する長四郎さんが、平成5年度の山形市技能功労者褒賞に続き、本年度の山形市伝統的工芸産業技術功労者褒賞を受賞した。長四郎さんは平清水焼の窯元「青龍堂」の故丹羽龍之介氏から贈られた書「ムダもなく、ムリもまたなく、ムラもなく、仕事は、楽にきちんと、吉田箱屋君」とともに一通の封書を大事にしている。

## キラリ山形

### 斬新なデザイン 木の温もり

昭和5年創業、(有)よしだ



抜群のチームワーク。長四郎さんを中央に右に長芳さん、左に「弟子入り」した五十嵐舞子さん

日本は古来より大切なものは桐の箱にしまおうという文化がある。桐は軽いだけでなく「自ら呼吸する」といわれるほど湿気を調整する。クッション性もあり、品物の鮮度を保ち、型崩れを防ぐ特長も。保存用と

してはもちろん、贈答用の箱として重宝されている。「山形桐箱」の魅力を求め続けて90年。優れたデザインと磨き抜かれた技術で「につぼんの宝物JAPANグランプリ」の工芸・雑貨部門で頂点に立ち、オンラインショップを開設し山形の伝統的工芸品を世界へと日々研鑽を積む「(有)よしだ」を訪れた。

代々お膳や重箱を作る木地師の家だった。初代の長助氏が正時代代終わりに、桐箱作りの親方に弟子入りし昭和5年に独立した。「家業を継がず桐箱作りの道に入ったのだから親から見れば『鬼子』と言われても仕方がない」と長助氏はちに山形新聞の取材に答えている。

「越中富山」の菓箱に端を発した

山形の桐箱づくりは、昭和30年代に活況を呈し、箱屋は県内に10軒あったという。家業を継いで65年、2代目の長四郎氏は「富山の製菓会社から毎日のように菓書で注文が来た。早朝から仕事にとりかかった」と語る。置き薬の入った引き出し箱は、いわば「山形桐箱」全盛時代の象徴でもあった。しかし、プラスチック製の菓箱に押されて注文はガタ落ち、見切りをつけて廃業転業を余儀なくされ、職人も10数人となった。こうした中、長助、長四郎さん親子は、桐箱本来の用途でもある骨とう品や美術工芸品用の桐箱に方向を転換した。地場産業の米沢織物や山形鋳物、平清水焼を入れる箱づくりに精魂を傾ける。

三代目となる代表取締役の長芳氏



ブックケース「本の正倉院」



KIRIBAKO御朱印帳ケース



ブレッドケース「吉田パン蔵」



スマホスピーカー

有限会社よしだ

代表取締役 吉田長芳  
住所 〒990-0829 山形市五日町6-9  
☎023-645-3025



hakonara by YOSHIDA (ハコナラ)

# 現代に生きる伝統工芸「山形桐箱」